

ヴェルダ・マーヨ通信

NO. 3

2018.1.30

治安維持法犠牲者・長谷川

テル顕彰会(仮称)事務局

☎/F0742-61-7194

お薦めの本

『長谷川テル』(長谷川

テル)編集委員会編、せせら

ぎ出版)入荷。

ご注文は、事務局まで。

一冊1700円(送料別)

テルの日本出国の秘話

治安維持法犠牲者・宝木武則さんの伝言

内容

川西洋太郎さんの急逝を悼む

宝木 武則・・・・・・・・・・・・・・・・・・2ページ

若きエスペランティストたちの軌跡

―宝木武則と長谷川テル―

松浦 由美子・・・・・・・・・・・・・・・・・・4ページ

古利・般若寺境内に

長谷川テルの記念のプレートを設置を・・・・・・・・・・6ページ



長谷川テル

長谷川テルの中国・上海への渡航の経緯を生々しく語る

当「通信」NO. 3に掲載する「川西洋太郎さんの急逝を悼む」と題した宝木武則氏の追悼文は、「反核産業人の会」会報 NO・二五(一九九〇・一〇・二五)の機関紙に掲載されたものです。二〇一七年十一月四日に開かれた「長谷川テルに思いをよせるつどい」に出席された大阪民衆史研究会の松浦由美子さんから提供されました。エスペラントで戦時下中国に渡って抗日反戦を訴え続けた治安維持法犠牲者・長谷川テルの中国上海への渡航の経緯を生々しく語った文章として貴重です。宝木武則氏自身もエスペランティストで、治安維持法犠牲者(一九三七年五月に大阪で検挙)です。中見出しは編集者が付けました。

また、「若きエスペランティストたちの軌跡―宝木武則と長谷川

テル」は、宝木武則氏と親交のあった松浦さんに、田辺が依頼して寄稿していただいたものです。松浦さんの回想文は、宝木氏との出会い、宝木氏から提供されたテルの日本出国にかかわる秘話などについて語っていただきました。松浦さんの回想は、テルと劉仁の仲をとりもつただけでなく、テルの中国渡航を助けた中塚吉次と、宝木武則氏の弟・宝木寛ら二人の獄死にも言及されています。テルの青春時代の事績、中国渡航をめぐるドラマなどは引き続き調査・研究が求められていることを痛感することしきりです。

松浦さんは、長年大阪教職員組合の書記としての活動とあわせ大阪民衆研究会の会員・同副会長として活躍されるとともに、ライブ喫茶ガット・ネロ（大阪市上本町）を運営し若い音楽家の支援やご自身もシャンソン歌手として活躍されて来た方です。

治安維持法犠牲者・長谷川テル顕彰会（仮称）の奈良県準備会
事務局長 田辺 実

川西洋太郎さんの急逝を悼む

宝木武則

長谷川テルの遺児と出席して直後に名古屋の当会員の活動家、川西洋太郎さんが、この八月十五日に狭心症で、発病後半日で急逝された。六十八歳だった。八月二十日に来阪して私に会うことになっていたのに。

川西さんは大正十一年七月十二日生まれ、大阪の豊中中学から関西学院専門部英文科卒、関大政治科一年の時昭和十八年十一月学徒動員で入隊、和歌山で終戦をむかえ、社会運動に挺身、故松本広治

さんの富士レジンKKの創業時、松本さんの御息興二さんの家庭教師をしたこともあるとか。昭和三十八年から四〇年にかけて富士レジンで再度働き故松本さんと親しく接する。昭和四十七年一〇月



左より川西洋太郎、歌人中川清子、宝木武則、劉曉嵐、後列で立っている人が坂手日登美の各氏。

「反核産業人の会」会報 NO.25 (1990.10.25)

古屋の
イヌズ
製作所
勤務。
五〇年
より半
年間ポ
ーラン
ドに駐
在して
いる。ポ
ーラン
ド、エス
ペラン
ト語の
創始者

ザメンホフ博士、彼はエスペランチストとなる。松本さんのすすめで、当会と本音会の会員であったが、富士レジン時代、岩村正八さんと仲良しだった彼は松本さん逝去後、急速に熱心に当会のため活動を開始し、名古屋に皆無だった会員の獲得に努力する。名古屋エスペラント会長の川合隆史さんと副会長の墨總一郎さんと宇井純

教授の弟子の藤村伸次さんを維持会員として入会させていただいた。墨さんも東大で宇井さん一番弟子だったとか。今年に入って、数回私も名古屋に出向き、川西さんがこの三人と帯同数回来阪された。

長谷川テル女史の遺児・劉曉嵐女史が

母の昔時のことを聞きに訪ねてくる

「戦争の中国かの「重慶反戦放送」で高名なエスペランチスト故長谷川テル女史の遺児、劉曉嵐女史が母の昔時のことを聞きに訪ねてくるといのがきまった七月八日、テルの出生地、山梨県猿橋に二人で同道した。この五月名古屋エスペラント協会の川合会長や墨さんの一行がブルガリア協会を訪問した時、私がお世話をしたブルガリア人と国際結婚をしている旧知の武藤佐枝子さんをソフィアで世話役に付けた。この武藤さんが郷里の猿橋に里帰りをしていただ。

五年前、ブルガリア国から国賓として招待されたとき私も武藤さんの世話になったのでお礼心もあった。武藤さんは私がデIMITROフ勲章やパルチザン勲章を授けられたとき、それがエスペラントによる昔時の社会運動であっただけに、とても喜んでくれた。日本人として肩身が広いとて。この武藤さんが、テル出生地の猿橋が故郷とは！

七月二十四日、川西さんの死の二十日前、劉曉嵐が私宅を訪ねてくるというので、川西さんも新幹線で大阪に来られた。

周恩来も真の愛国者であり、英雄として称した長谷川テルは、良い意味の日中の掛け橋だと思う。テルさんは中国から留学生のエスペランチスト劉仁と結婚し、劉曉嵐が生まれた。

テルさんは上海への脱出に成功した

エスペラントの同志、神戸のマルシユの発行人

中塚吉次が主役だった

川西さん列席のもとに関係者数人で当時の秘話をした。劉曉嵐も誰も知らないことを。昭和十二年四月十五日、日中戦争開始の二カ月前、テルさんは上海への脱出に成功した。

テルに関する本は沢山出ているが、真相にほど遠い。私のエスペラントの同志、神戸のマルシユの発行人、中塚吉次がその主役だった。彼も私もテルの脱出直後検挙され、またテルを知る人として大島義夫と、もう一人の証人栗栖継も検挙されている。中塚の縁故のさる大会社の重役のルートであった。その方の迷惑を恐れて私は口をつぐんだ。このことは栗栖も大島も知らない。

曉嵐は「母は勇ましい行動の人ということは分かりますが、女としてはどうだったのでしょうか。それを知りたいです。」と聞く。

テルの失恋話、相手はカタパンだった。宝木のような、やわらかい男にほれてくれたんならいつべんにOKで曉嵐が宝木の娘だったかも知れないと一同大笑。

川西さんもこの席で楽しく歓談しておられ、また八月二十日に来阪、曉嵐とも再度、歓談できたのに。

川西さんはテルに関する本を宝木に送ろうとして八月十四日午後二時ごろ郵便局に行きそこで急に苦しくなり発病。タクシーで入院したものの翌十五日早朝七時に逝去されたとか。十五日にその本と、十四日付の川西さんが着いた。それが彼の絶筆となった。

今しげしげとその絶筆をながめ川西さんをしのんでいる。合掌。

若きエスペランティストたちの軌跡

―宝木武則と長谷川テル―

松浦由美子（大阪民衆史研究会）

テルの歌がとりもつ縁

田辺美さんとのひよんな出会いから、この一文を書くことになった。長谷川テルの顕彰活動をされている田辺さん達が、ケイ・シユガーさんにテルの歌「希望の星 ヴェルダ・マーヨ」を依頼した。二〇一七年一〇月八日「希望の星」を歌う彼女のライブ会場で偶然、



シャンソン歌手でもある松浦由美子さん、

田辺さんとお会いしたのだ。それまで面識もなくメールや手紙だけのお付き合いだったが、大阪外語学校の史料を提供いただいたのでお礼が言いたかった。ライブ終了後、大阪駅まで一緒に。奈良でテルの顕彰活動をしているというののは、宝木武則さんだとご本人から聞いた。

たがご存知ですか」と尋ねた。田辺さんは初めて聞いたふうで「一月四日奈良で行われる『つどい』で話してほしい」と依頼されたのが、そもその始まりである。

大阪におけるエスペランティストの顕彰

長谷川テルに関しては、エスペラントの関係者が早くから研究しているという認識を持っている。一九八三年の「平和のための大阪の戦争展」でも、テルや宝木武則さんの弟・寛（ゆたか）ら戦争に抵抗したエスペランティストがとりあげられていた。宝木寛については一九八二年八月から一年間、「不屈」大阪版に「葦のうた―寛の生涯」が連載され、八四年には「レジスタンスの青春―人民戦線運動と宝木寛の生涯と」が出版されている。テルの遺児・劉曉嵐来日のことやその後、武則さんが堺の自宅を曉嵐さん家族に提供していることも聞いていた。テルの日本脱出については曉嵐さんが語るのが適任だろうと今も思っている。

「労働雑誌」関西支局の調査から

大阪市港区の一岡ビルに日中戦争前夜、日本で反ファシヨ統一戦線を標榜した「労働雑誌」関西支局があった。一九二八（昭和三）年三・一五事件、一九二九（昭和四）年四・一六事件、その後の度重なる治安維持法大弾圧で、一九三五（昭和一〇）年三月日本共産党中央は機能停止に陥る。「労働雑誌」は同年一月、「労働者に分かりやすい啓蒙雑誌、一党一派に偏した政治的主張はせず、大衆的なもの」「労働者のキング（誌）をを目指す」「大衆の知恵と娯楽」をスローガンに発足。「労働雑誌」発表懇談会には発起人の杉山元治郎・

加藤勘十・小岩井浄や秋田雨雀・中條百合子など労働組合関係や文人のそうそうたるメンバーが顔をそろえた。

四月創刊三〇〇部、翌三六年には七〇〇部に達する。配布は労働組合など組織配布、残りは書店販売。飛躍的に読者を増やしたのは大阪港南の全労・総同盟合同運動の前進がある。関西支局開設が急がれ、川上貫一を支局長に、岩間光男を支局長として一九三六（昭和一一）年一月大阪市港区一岡ビルに入居する。「関西支局ニュース」を発行し、読者会も積極的に開いていた。警察側は関西支局のサークル人数を一〇〇〇人とみている。「労働雑誌」における国際通信や反ファッショ人民戦線の紹介などエスペランティストの果たした役割は大きい。一二月、共産党再建・人民戦線事件で編集部や関係者が多数検挙され廃刊に追い込まれる。

手練り寄せた糸

一九八〇（昭和五五）年港戦争展を取りくむ事前のフィールドワークで「労働雑誌」関西支局のことを知った。しかし、関西支局のことを記している文献の記述には「ビルは三階建て（実際は四階建て）、汚い建物（当時は新しいはずなのに）」とあった。同じ地帯にもう一つ汚いビルがあったのか疑問を持ち、それらを解決するには「入居者名簿」しかないと思った。「一岡ビル入居者名簿 市岡警察署」発見まで一〇年かかったが、その間「労働雑誌」を支えていた東成無産者診療所関係者を探した。まず、うえに病院院長だった桑原英武さんから始まり、糸を手練り寄せるように奈良・五條市に住むエスペランティストの福本正夫さんにとどり着いた。一九九一（平成三）年一月一五日、福本さん宅で聞き取りをしていると、不

意に電話がかかって来た。福本さんは「あんた、岩間光男を知らんか。大阪の港区から岩間を探している人が今、来てるんや」と言うなり、私に「岩間を知っているのは自分くらいだと言っているから、早く電話に出なさい」と受話器を差し出した。その電話の主が宝木武則さんだった。

思いもかけぬ出会いだったが、一月二六日、大阪地下鉄「緑地公園」駅の「木村屋」で待ち合わせた。テルの遺児・劉曉嵐さんの待ち合わせと同様、茶色のレーニン帽を被って武則さんは現れた。

「労働雑誌」とエスペラント

「岩間は戦死です。昭和二〇年八月、川上貫一・岩井弼次・小倉温自らが集まった時、岩間の話ができました」。エスペランティストの武則さんは当時大阪市大正区鶴町の市電の車庫裏に住み、労働者にエスペラントを広めるため、「ラ・フラート（兄弟）」誌を弟・寛さんと発行。寛さんは「労働雑誌」の国際欄にエスペラント国際通信から得たニュースを訳し「古賀豊」「高木」のペンネームで投稿、岩間光男が原稿を取りに来ていたと言う。自宅で聞き取りをしていると誕生日の話になった。「宝木さんは三月七日ですか？私も三月七日生まれです」「へー、奇遇だね。長谷川テルも三月七日だよ。三人一緒だ」「宝木さんと私は四〇歳違いですね」「テルは一年違いだ」。テルの話は何も聞いていないのに、誕生日が一緒ということになり、またテルの話になった。帰り道、途中までおくってもらうことになり、またテルの話になった。「テルを逃がしたのは色々と言う人もいるが違う。三井物産の社員に頼んで僕が逃がした。迷惑がかかるから、言わなかった。死ぬまで持っていくつもりだ」といったように思う。

若きエスペランティストたち

長谷川テルと宝木武則さんの出会いは一九三六（昭和一一）年三月一七日、大阪ミナミの喫茶店で弟・寛とエスペラント誌「FRATO（兄弟）」の初会合があった時だった。テルは神戸のエスペラント誌「MARSU（進め）」の中塚吉次のさそいで東京からやって来た。テルの失恋があったので中塚は四月に上京し、テルと東京高等師範（現筑波大）の中国人留学生・劉仁の仲をとりもつことになる。テルが日本を脱出した後、宝木兄弟や中塚吉次も検挙され寛は獄死同然、中塚も獄死。「しゃべっていない人は名前が残らない。無名の人を掘り起こし、生き残った自分は表彰役である」と武則さんはいっも言っていた。

若きエスペランティストたちの命を懸けた協力がなければ、テルの日本脱出は難しかっただろう。武則さんからいただいた資料にはテルの日本脱出について書かれているものがいくつもある。「反核産業人の会会報NO.二五」（一九九〇・二〇・二五付）には「神戸の“MARSU（進め）」の中塚吉次が主役」と記しているが、ニュアンスの異なる文書もある。裏付けが必要だが、テルの脱出にはエスペラントティスト中塚吉次と宝木武則が深くかかわっていたようだ。

古刹・般若寺境内に

長谷川テルの記念のプレートの設置を

私たちは、奈良・般若寺境内に長谷川テル記念のプレートの設置の実現を目指しています。それは、『テルの生涯』（利根光一）に掲

載されている次のような文章に基づくものです。

「奈良の日々」（長戸恭）から

「長谷川さんと私がはつきり方針をきめたのは四年生になった春（昭和七年）4月30日の事でした。私は今でもその日のことをはつきり覚えていきます。雨上がりの土曜日の午後でした。散歩に行くうと手を挙げて廊下から合図する彼女に私は同じく手を挙げて答えました。荒れはてた般若寺の境内はひっそりしていました。八重桜のぼたぼたした花と山吹の真黄色なしげみの中で、私たちはいっしょにやろうと誓いました。

根本的にはあなたと私の考え方はいくらかちがうようだけど

と彼女はいいました。」（「奈良の日々」『テルの生涯』 利根光

一 要文社 増補 281〜282ページ）

注 長戸恭は、1929（昭和4）年4月名古屋から奈良女子高等師範学校に進学し、1932（昭和7）年9月に4年生の時に、治安維持法違反容疑で逮捕され、退学させられた。

顕彰碑ができて語り伝えられることになれば、嬉しい

十一月四日に開いた「長谷川テルに思いをよせるつどい」についての資料を、奈良女子大卒業生の皆さんに送ったところ、次のような共感の声が届いています。

・テルさんは大先輩ですが、高橋哲哉氏の講演で初めてその業績を知るなど、同窓会ではあまり語られていなかった方でした。顕彰碑ができて語り伝えられることになれば、同窓生としても嬉しくおもいます。

（Mさん 名古屋市）